寄稿

3 バリアフリー和尚これにあり

紀三井寺　貫主

前田　泰道

平成 29 年 11 月に紀三井寺の住職に就任（晋山）して 3 年半になります。

父であり、先代住職だった前田孝道師は、弱冠34歳、昭和36年に晋山してより遷化する（亡くなる）まで実に 56 年の永きに亘り住職を務めて、寺内外に幾多の功績を残しました。

還暦直前に住職となった私には、それほど遺された寿命は無かろうと観念しつつも、生まれ育ったお寺に、わずかでも恩返しをして逝きたいと思わぬ日はありません。

紀三井寺の長い歴史の中で、血のつながった親子で住職の承継が行われたのは、私が最初です。

私は、昭和 33（1958）年 3 月 18 日に、父・師僧の長男として生まれました。

毎月 18 日は紀三井寺の御本尊・観音様の御縁日で、しかも春のお彼岸の初日（発願日）だったため、「おまえはとても御仏縁のある日に生まれた。坊さんになるべく生まれて来たのだ。」と聞かされて育ちました。

12 歳の誕生日を前に得度式という、僧侶の道に入門する儀式を受けましたが、それは、長髪が許された母校の小学校の卒業式直前で、急に丸坊主となって登校した私を見て、級友達は驚き、私自身も、平凡な人生は歩めないのだと、その時悟りました。

以来、実際はそれほどではないのに、「注目されている」という自意識過剰に陥った私は、何だか地元を窮屈に感じ始め、16 歳になると和歌山を飛び出して下宿し、兵庫県の私立高校に通いました。故郷を離れる為だけに選んだその高校は、キリスト教の高校で、毎週チャペルという朝礼があり、賛美歌を歌い、宗教科の先生のお説教を聞くのでした。

クラスでは、アルファベットの出席番号順に座席が配置され、私の前の席の M 君は、神戸のキリスト教会の牧師さんの息子でした。

牧師の息子と坊主の息子が前後に並んで座っ

ていたのですが、彼は熱心なクリスチャンで、学科の間の休憩時間には、私の方を振り返って、何と宗教論争を挑んで来ました。

仏教は変だ、と言うのです。君はお寺の子らしいが、あの漢字ばかりのお経なるものの意味が判っているのか？

意味の判らぬ物を、ただ唱えるのは馬鹿らしい。キリスト教の聖書は、その点分かり易い。賛美歌も美しい。次の週末、うちの教会に来ると良い。父に頼んで洗礼をしてもらおう。仏教なんか捨てないと天国には行けない。天国の門は狭いのだ……と、寺の長男を相手に、改宗と洗礼を勧めるのです。

僧侶の道から少し距離を置きたいと、いわば逃亡してきた私ですが、こうまでケチョンケチョンに、未だ短き我が半生を否定されてしまいますと、反論の一つもしたくなります。しかし、哀れなるかな、打つ弾がない。仏教の勉強などしたことのない私には、彼の言うとおり、般若心経は唱えられても、その意味を説くことは不可能でした。

エスカレーター式に大学まで行ける高校でしたが、宗教戦争に敗北した私が、仏教を学ぶ為に進路変更をしたのは、その直後でした。

その後、大学で学んだ学問としての仏教は、とても新鮮でした。呪文の様に唱えていたお経には、深い意味が包蔵されていて、それは、迷っては袋小路に入り込んで仕舞いがちな人の歩みを、まるで高みから見て取らせて出口に導く……、ただ信じれば救われるという教えではなく、難儀に直面する者に、冷静で新たな視点を与える「覚醒」の教えだということを知ったのです。

と同時に、こうした「目からウロコ」の教えに、寺に生まれ育った私のような身でさえ隔てられている、大事な教えは覆われている、と感じました。

折角の貴い宝も、それを受け取ることが出来なければ、無いも同じです。

この国には、無数の「仏教徒」が居ながら、その教えの恩恵を肌で感じ、生きる指針としている人がどれほど居られるのか、甚だ心許ないと思えたのです。

大学卒業後すぐに紀三井寺に戻り、先代住職に仕え、副住職として35年間奉職している間も、その思いは心から離れませんでした。

さて紀三井寺は、奈良時代の宝亀元（770）年に、唐僧・為光上人によって開基された、古い寺です。東大寺が752年の創建ですからその18年後。奈良を中心に、少数のお寺が建立され始めた当初の時代です。

そして紀三井寺は昨年、2020年に開創1250年を迎えました。

しかし、昨年はご存知の通り一年中、新型コロナウイルスの大流行・パンデミックに世界中が翻弄されました。

実は、当寺の大事な節目である開創1250年に際し、私は大きく3つの取り組みを予定していました。

秘仏御開帳、記念法要、そして記念事業とその勧進の開始です。

紀三井寺では50年に一度、秘仏となっている御本尊・十一面観世御菩薩像と、同じく並んで秘仏である千手観世音菩薩像を御開帳して、一般に公開するのを慣例としています。

なるべく大勢の人にご縁を結んで頂きたく、今回は春秋二回、それぞれ百日程の期間を定めて御開帳を実施しましたが、春の御開帳の最中だった4月初旬から5月末まで、疫病に掛かる緊急事態宣言が発出され、その間は、人を集めてしまう御開帳は停止せざるを得ませんでした。が、秋は概ね順調に行われ、疫病下にもかかわらず、2万人余の方が、秘仏の二尊、観音様方と出逢われました。

（昨年中止せざるを得なかった期間、4月8日～5月29日は、今年の同期間「よみがえり

秘仏御開帳」として、延長実施されます）

児童のお練り行列等を予定していた記念法要は、疫病下、断念せざるを得ませんでした。

最後は、記念事業と勧進の開始です。

紀三井寺が出来てから、1250年目となるこの年を起点として、次の50年を見据えて、どんな事業を行うべきか、35年間副住職として寺の業務に携わりながら温めてきた、様々な思いを練る内に、それらが一つの言葉に集約され得ることが見えてきました。それは障害（障碍・障礙）を取り除くという意味の「バリアフリー」という言葉です。

まずは、「御参詣のバリアフリー」。

紀三井寺の正面には、231段の石段が待ち構えていて、歩行困難な参詣者を拒んでいます。この石段は、紀伊国屋文左衛門が、玉津島神社の宮司の娘・かよと出逢い、出世のきっかけともなった結縁坂であり、厄年の段数を踏み越えることで厄除けにもなるとされる「結縁厄除坂」ですが、あの石段の為に参詣は諦めるという方も多いのです。

総代会では、裏参道にある車道の更なる整備案も出ましたが、手狭な山上駐車場の拡張は困難であり、さらに地元の活性化の為には、土産物店が並ぶ門前町を通って来山される参詣者が、楼門から本堂まで至ることが出来る、高低差40メートル強のバリアフリー施設が必要との結論に至りました。

まず初年となる昨年、2020年には、トイレのある山上駐車場から本堂まで、高低差11メートルのエレベーターの建設に取りかかり、11月に竣工しました。

現在、この山上駐車場の高さまで、一番下の楼門から達する高低差31メートルのケーブル施設の計画に着手しており、2021年度内の完成を目指します。

次に、「景観のバリアフリー」です。

紀三井寺の宝は、何でしょうか？　観音様だという人も、早咲き名所の桜、と言う人も、寺名の起こりの「三つの井戸」という人もおありでしょう。

しかし、紀三井寺を訪れた方がまぶたに焼き付けて帰って行かれるのは、境内から和歌の浦を望む景観です。日本遺産「絶景の宝庫　和歌の浦」に登録された景色は、古来無数の人々が当寺を訪れて愛でた景観なのです。

海の無い奈良の都から行幸された聖武天皇が輝く海面を眺めて「明光浦（あけのうら）」と名付けたことに始まる和歌の浦は、やがて和歌山という地名の起こりになります。

『養生訓』を書いた貝原益軒は、松島、厳島、天橋立の日本三景と比べても、この景色には敵わないと絶賛しています。

文豪・夏目漱石は、主人公達が和歌の浦の夕景を眺める紀三井寺境内を、『行人』という小説のクライマックスの舞台装置に採用しています。

大正時代、摂政宮時代の昭和天皇が当寺に行幸された際の消息を伝える記録には「紀三井寺境内より瞰下し給えば、和歌の浦の全景、御一望の中に収まり、長汀曲浦の続く限り、金波銀波ゆるやかにくだけ、さらに又遠く白帆の行衛、煙波の間に消ゆるあたり、阿波、淡路の島山、詩歌の夢と浮かぶ景勝を御興深く御展望あらせられたるやに拝せられた。」とあります。

建物が増え、道路や線路が走り、古の景観とは異なるとはいえ、空気の澄んだ晴天には、和歌の浦の近景と共に四国の山々も遠望できる絶景、特に夕景は、未だ眺める者の心を捉えて離しません。様々な難儀に疲れた心を癒やす力さえ有していると自負しています。

この当寺の宝・景観も現在、仮設舞台や樹木によって大きく遮られていますので、遮蔽しているものは解体・伐採して、今秋までには、昭和天皇のご覧になった景観の広さを取り戻した

いと考えています。

さて、景観を取り戻して境内の魅力を積み増し、昇降利便を高めて参詣者の御来山頻度を高めることが出来たとしても、その先にある障碍を取り除かねば、今回の記念事業は、意味を成しません。

それは、あの高校時代からずっと心の底に澱のように沈殿した思い、仏教の貴い教えが妨げられ、覆われていて、寺に詣れば手を合わす人達にも届いていないということです。

参詣や景観といったハード面でのバリアフリー事業の先に、ソフト面での障害除去事業、「伝道のバリアフリー」が待っていて、これが私の最後の仕事となると考えています。

新型コロナウイルス禍は、伝道にとっては強敵で、紀三井寺御信徒の関わる様々な法話会は中断を余儀なくされています。が、毎朝の勤行と一口法話をユーチューブ配信したり、18 日夜の勤行をライブ配信したりしてリモート伝道を取り入れています。

が、やはり布教では、同じ場を共有する空気感が殊更に大事で、重文の仏像拝観を取り入れた布教伝道の出来る「コロナ後」を見据えて、今その案を練っております。

考えてみると、人類の歴史は、バリアフリーの軌跡です。ある範疇の人々を阻む「ベルリンの壁」を壊して、歴史は進展しました。

身分制度を打ち破る試み、選挙権を広げる闘い、人種差別撤廃運動、男女の性差別をなくす営み……。全て、障壁を温存することで特権を維持したい勢力と、障壁を取り払うことで、自由と平等の範囲を広げようとする勢力のせめぎ合いであり、全て後者が命がけでバトンをつないで成果を上げて来たのです。

バリアフリーこそ、賢者の指針です。

さもあれば「バリアフリー和尚」として終身任期を全うすることが、私の今の夢です。

もっとも、坊さんがこんな夢を語ること自体、悟りを妨げる煩悩、バリアなのかもしれませんが……。